

## 【漁況】

### [マアジ]

#### 1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成30年は11万7千トンとなりました。

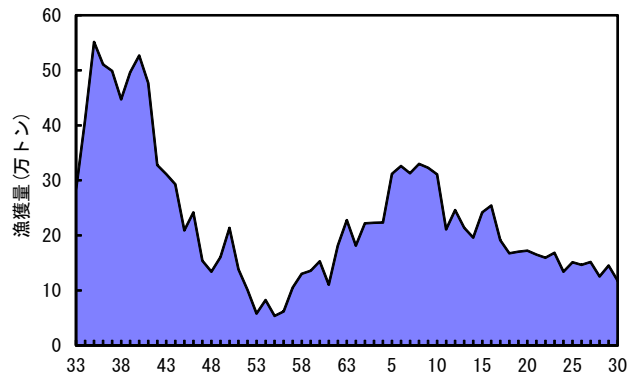


図 全国のマアジ漁獲量の推移

#### 2. 県内の令和2（2020）年10～12月期の漁況の経過

##### 【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、10月に甌下でマアジ小（1歳魚：2019年生まれ）主体の漁場が形成されました。12月に五島沖でマアジ小（1歳魚：2019年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、11月に開聞沖、内之浦沖、志布志沖でマアジ豆、小（0～1歳魚：2019～2020年生まれ）主体に漁場が形成されました。12月に志布志沖でマアジ小（1歳魚：2019年生まれ）主体に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で727トンの水揚げで、前年の203%及び平年の122%でした。

#### 3. 県内の令和3（2021）年1～3月期の見とおし

漁獲主体：マアジ小、豆（1～2歳魚：2019～2020年生まれ）

来遊量：前年を上回り、平年並

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期に引き続き、今期もマアジの2019～2020年生まれが漁獲の主体となることが予測され、前年を上回り、平年並となると考えられます。

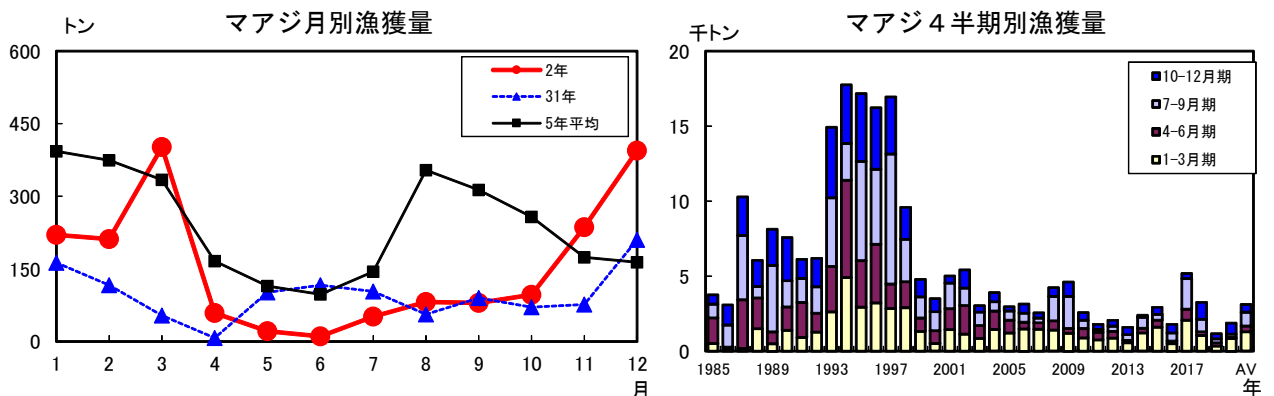


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和2（2020）年12月23日までの水揚量を使用

## [サバ類]

### 1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークに年々減少し、平成3年には26万トンとなりました。

平成5年から増加に転じ平成9年には85万トンとなりましたが、平成14年には28万トンまで減少しました。

平成18年に65万トンまで増加したあと減少傾向となりましたが、平成30年は54万1千トンとなりました。

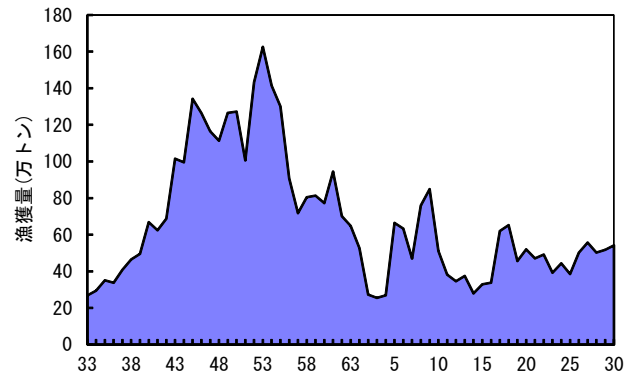


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

### 2. 県内の令和2（2020）年10～12月期の漁況の経過

#### 【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、10月に甑東でサバ類豆（0歳魚：2020年生まれ）主体の漁場が形成されました。12月に甑東でサバ類小（1～2歳魚：2018～2019年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、11月に野間池沖でマサバ豆（0歳魚：2020年生まれ）主体の漁場が形成されました。12月に志布志沖でゴマサバ大（4～5歳魚：2015～2016年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で2,191トンの水揚げで、前年の71%及び平年の66%でした。

### 3. 県内の令和3（2021）年1～3月期の見とおし

漁獲主体：ゴマサバ小～大（2～5歳魚：2016～2019年生まれ）

マサバ小～大（2～5歳魚：2016～2019年生まれ）

来遊量：前年を下回り、平年並

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期は、ゴマサバの産卵親魚群とマサバの産卵親魚群が漁獲の主体となります。ゴマサバの直近の漁獲が低調に推移していることと、マサバ太平洋系群の卓越年級群であった2013年級群の残存資源量が少ないことから、好調であった前年を下回り、平年並となると考えられます。

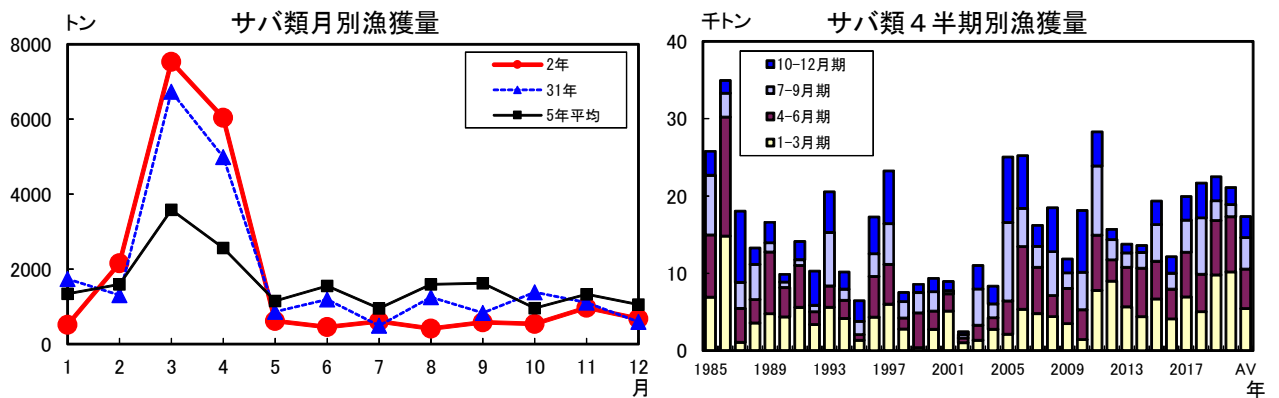


図 サバ類まき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和2（2020）年12月23日までの水揚量を使用

# [マイワシ]

## 1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

平成元年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、平成14～22年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、平成23年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、平成25年以降は20万トンを超える漁獲が続き、平成30年には52万トンとなりました。

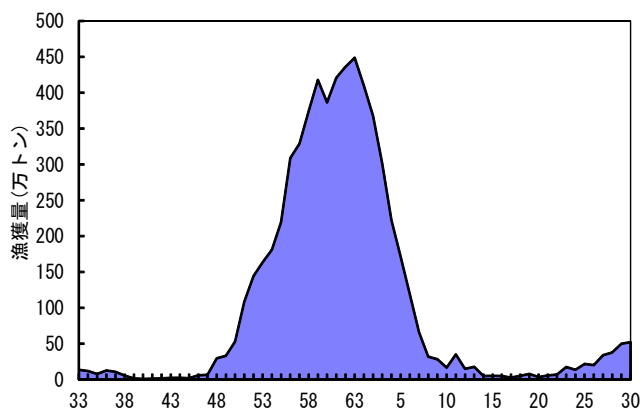


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

## 2. 県内の令和2（2020）年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、10～11月に甑島周辺で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、10月に坊津沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期を通じて小～中羽（0歳魚：2020年生まれ）主体に1,806トンの水揚げで平年の123%でした。（前年はまとまった水揚げがなかったため比較できず）

北薩海域の棒受網では、250トンの水揚げで平年の666%でした。（前年はまとまった水揚げがなかったため比較できず）

## 3. 県内の令和3（2021）年1～3月期の見とおし

漁獲主体：中～大羽（1歳魚：2020年生まれ）

来遊量：前年・平年を上回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期に引き続き、今期も漁獲の主体となる中～大羽（1歳魚：2020年生まれ）は、前期に前年・平年を上回って推移したことから低調だった前年・平年を上回ると考えられます。

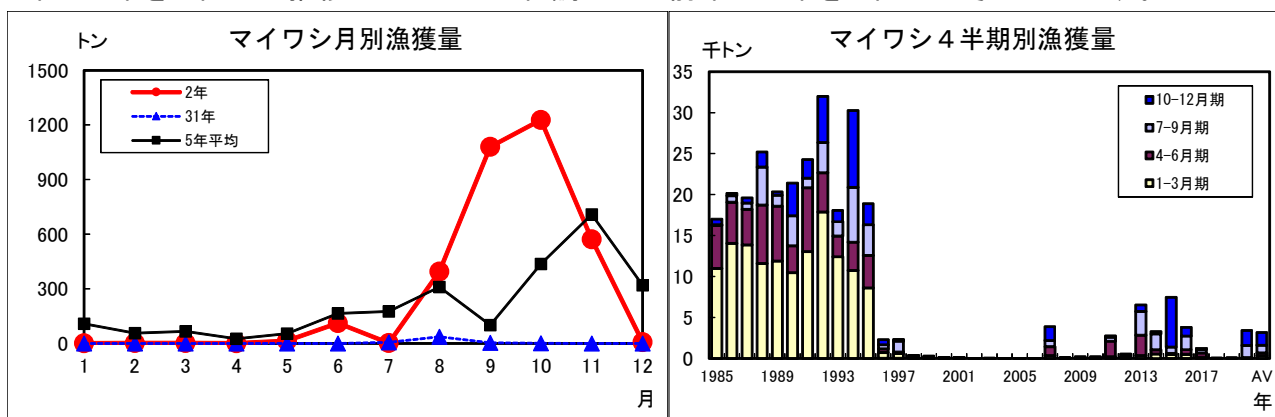


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和2（2020）年12月23日までの水揚げ量を使用

# [ウルメイワシ]

## 1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ平成12年には2万4千トンまで減少しました。

平成15年以降は再度増加傾向に転じ、平成28年は9万8千トンで昭和33年以降では最高の漁獲量となりましたが、平成30年は5万4千トンと大きく減少しました。

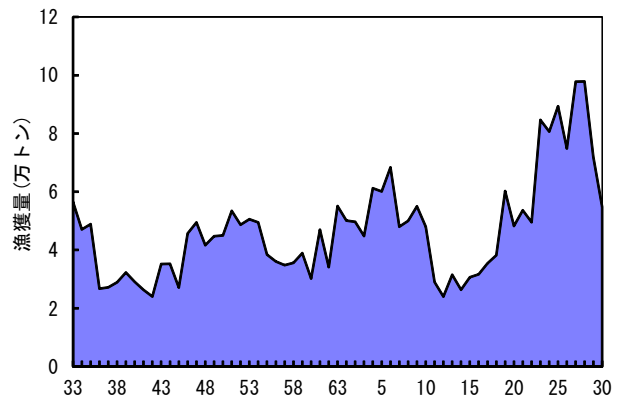


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

## 2. 県内の令和2（2020）年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、10～11月に甑島周辺で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、10月に宇治、坊津沖、11月に野間池沖、佐多沖、枕崎沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期を通じて小～中羽（0歳魚：2020年生まれ）主体に1,501トンの水揚げで、前年の91%及び平年の49%でした。

北薩海域の棒受網では、106トンの水揚げで、前年の47%及び平年の22%でした。

## 3. 県内の令和3（2021）年1～3月期の見とおし

漁獲主体：中～大羽主体（1歳魚：2020年生まれ）

来遊量：低調だった前年を上回り、平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期に引き続き、今期も中～大羽（1歳魚：2020年生まれ）が漁獲の主体となります。前期（10～12月）と今期（1～3月）の漁獲量には正の相関があり、これを基に予測すると今期は、低調だった前年を上回り、平年を下回ると考えられます。

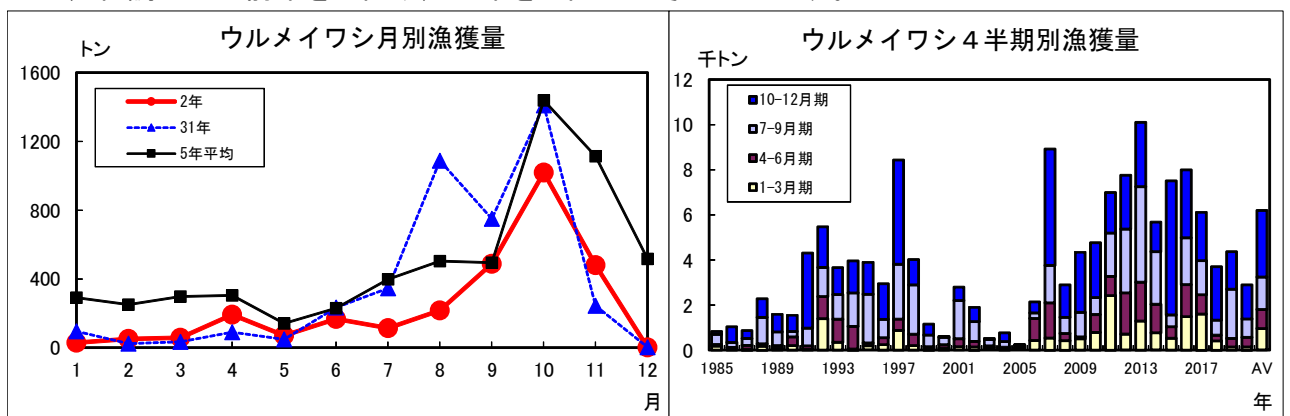


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和2（2020）年12月23日までの水揚量を使用

## [カタクチイワシ]

### 1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成30年は11万1千トンとなりました。

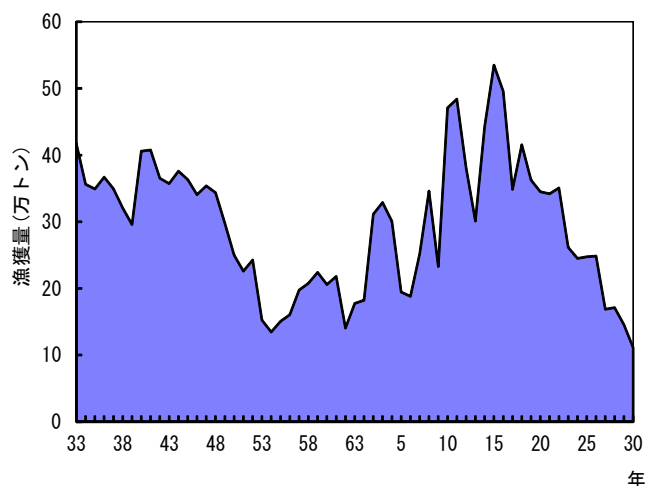


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

### 2. 県内の令和2（2020）年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、10～11月に甑島周辺で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、10月に津倉、坊津沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、大羽（1歳魚：2019年生まれ）主体に1,120トンの水揚げで、平年の284%でした。（前年はまとまった水揚げがなかったため比較できず）

北薩海域の棒受網では、96トンの水揚げで、前年の237%及び平年の284%でした。

### 3. 県内の令和3（2021）年1～3月期の見とおし

漁獲主体：小～中羽（1歳魚：2020年生まれ）主体に、大羽（2歳魚：2019年生まれ）が混じる

来遊量：低調だった前年を上回り、平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期の漁獲量は、10月にまとまった水揚げがあったため前年・平年を大きく上回っているものの、11～12月の漁獲量は平年を下回っています。このことから今期は、低調だった前年を上回り、平年を下回ると考えられます。

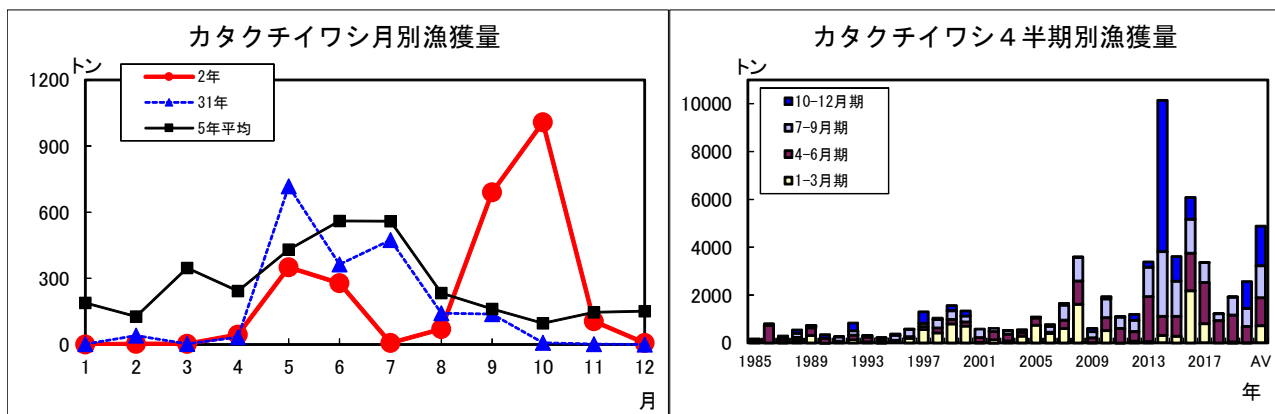


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和2（2020）年12月23日までの水揚量を使用

# [シラス]

## 1. 経年経過

バッチ網漁業の漁獲量は、西薩海域では、平成 11 年の 5,450 トンをピークに減少傾向を示し、平成 14, 15 年と 1,000 トンを下回り低調に推移しました。その後、平成 16 年は 3,507 トンと比較的好調に推移しましたが、平成 17 年以降減少傾向を示し、令和元（2019）年は 679 トンとなりました。

志布志湾海域では、平成 19 年まで増加傾向を示しましたが、その後、1,000 トン前後で増減を繰り返しながら推移し、令和元（2019）年は 873 トンとなりました。

## 2. 令和 2（2020）年 9～11 月の漁況の経過

西薩海域では、カタクチシラス主体に 60 トンの水揚げで、前年の 17 %、平年の 13 %でした。

志布志湾海域では、カタクチシラス主体に 378 トンの水揚げで、前年の 92 %、平年の 72 %でした。

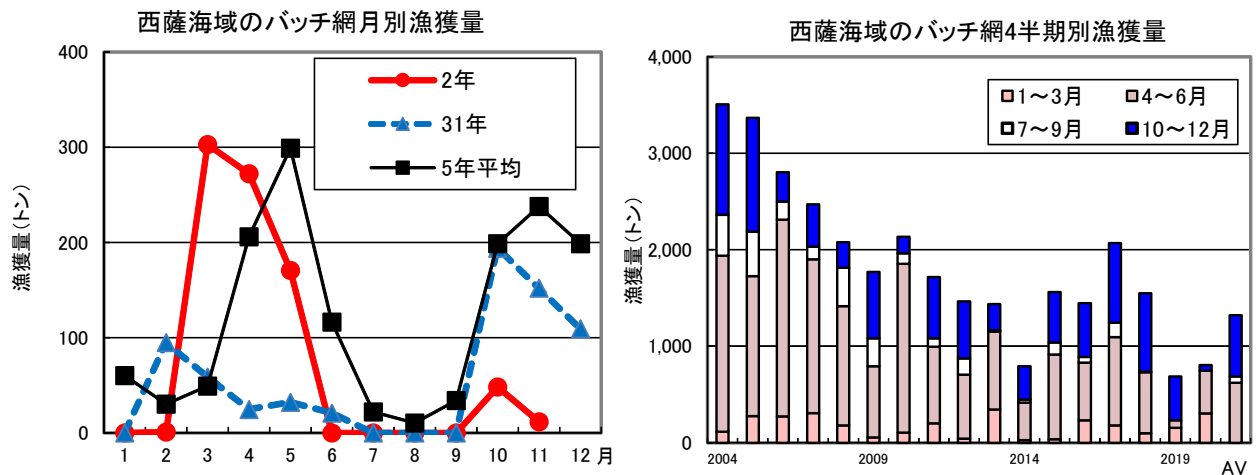


図 西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化（4 漁協計）

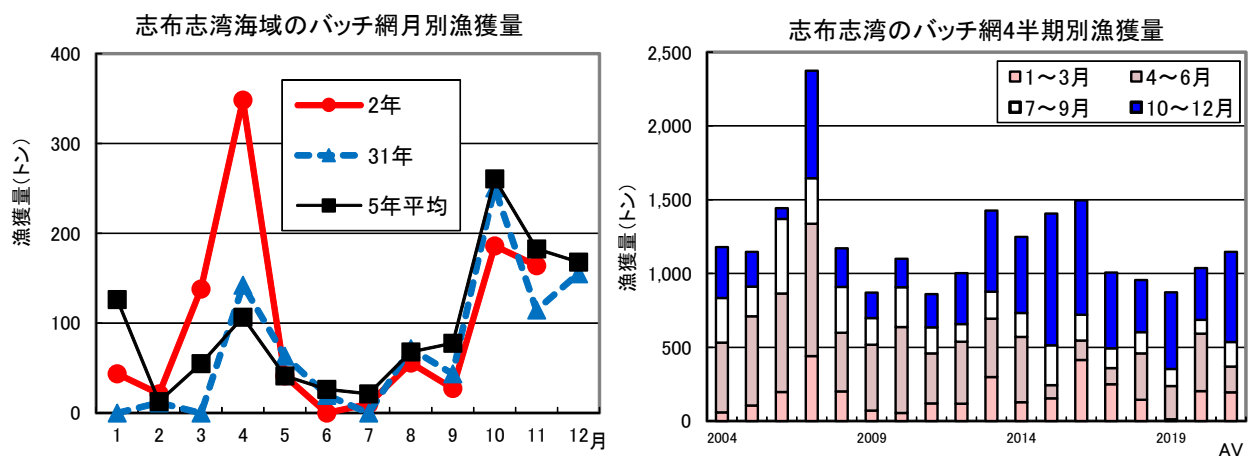


図 志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化（2 漁協計）

※平年値は過去 5 年の平均値 (AV)，令和 2（2020）年 11 月 30 日までの水揚量を使用



[イワシ類参考資料]

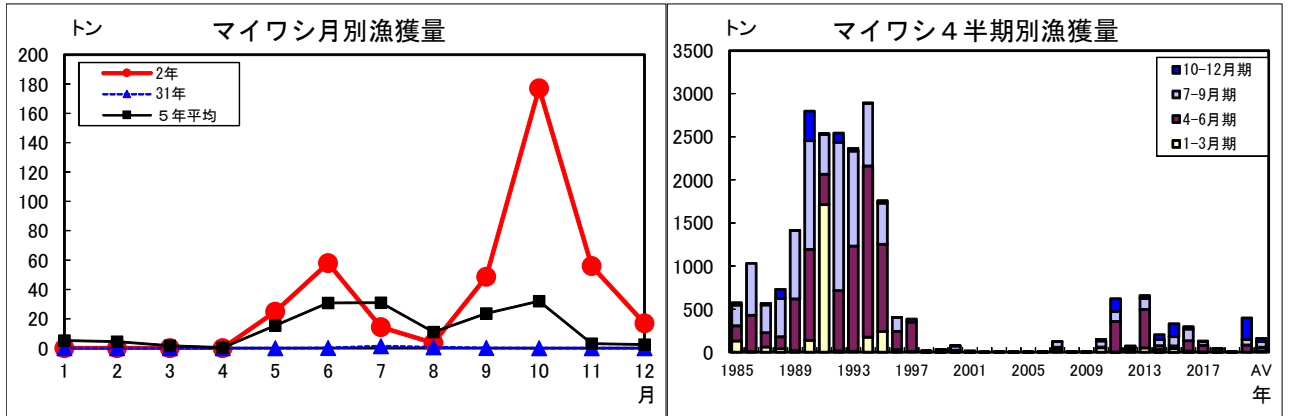


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

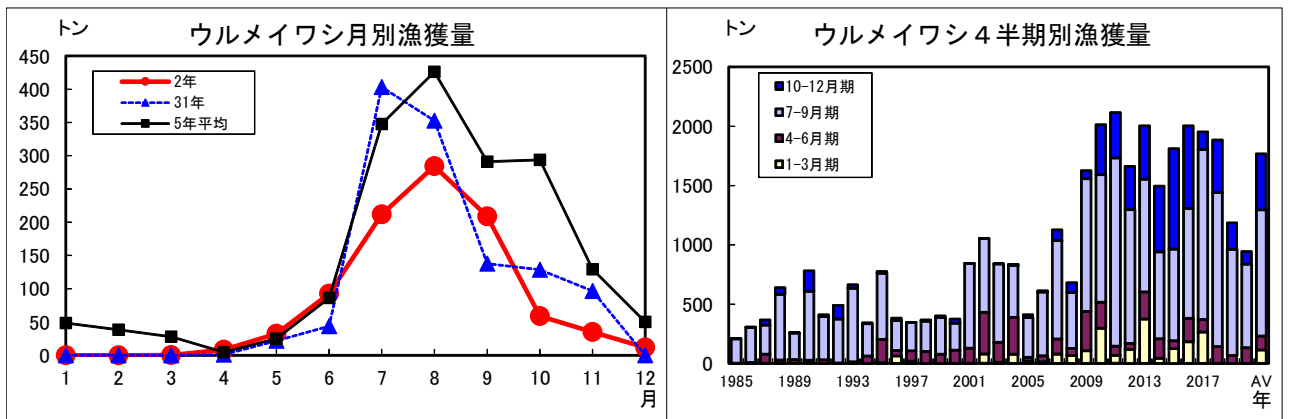


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

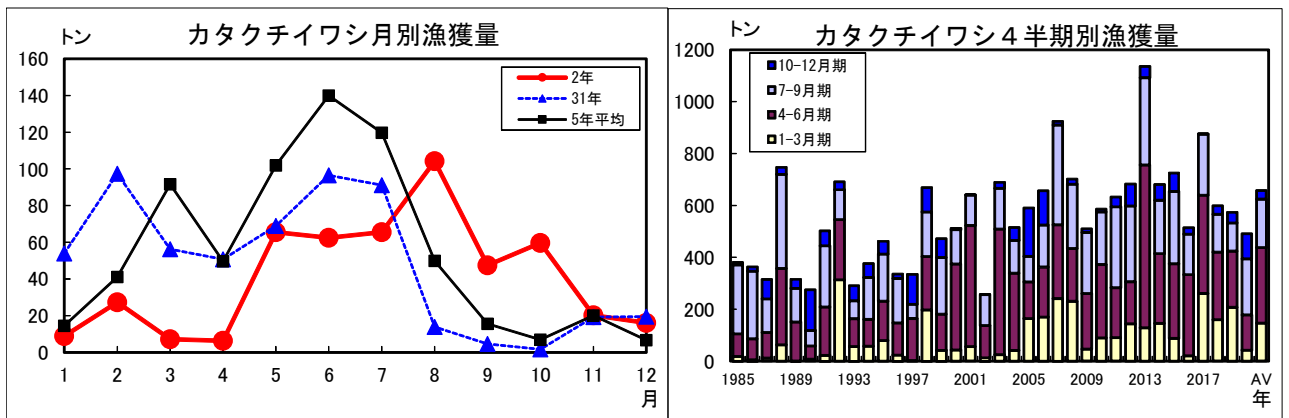


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 令和2(2020)年12月23日までの水揚量を使用

## [ムロアジ類（参考：漁況経過のみ記載）]

〈クサヤモロ，モロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和2（2020）年10～12月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は，平成2年の21,700トンピークに急減し，平成6年以降は，1,500トンから5,000トンの間での推移しており，令和元年は3,627トンとなりました。

4港計のまき網では，種子島南，屋久島南，島間沖でクサヤモロ小，中小主体の漁場が形成されました。期全体で778トンの水揚げで，前年の30%及び平年の49%でした。

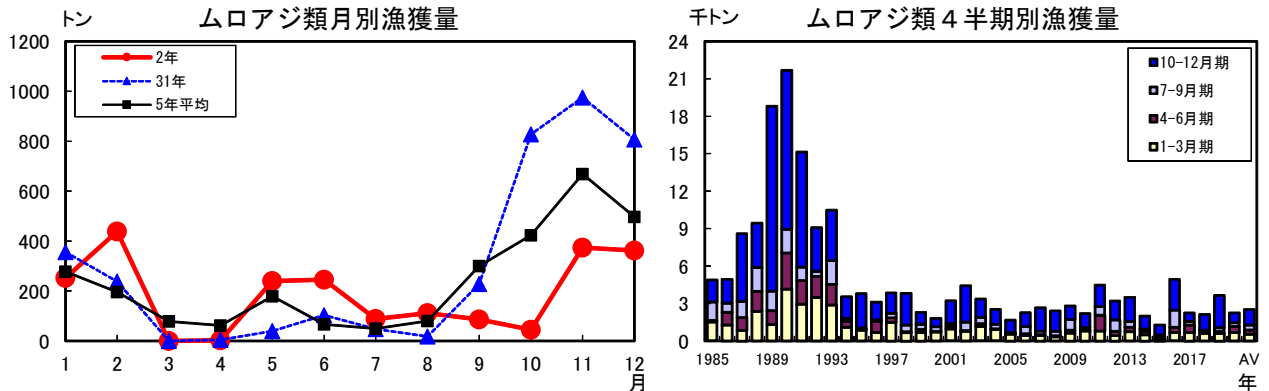


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和2（2020）年12月23日までの水揚量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和2（2020）年10～12月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は，平成元年の5,300トンピークに一旦減少し，平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成20年に一旦増加したあと再び減少傾向を示しましたが，令和元年は1,211トンとなりました。

4港計のまき網では，主に屋久島南でオアカムロ小主体の漁場が形成されました。期全体で77トンの水揚げで，前年の19%及び平年の26%でした。

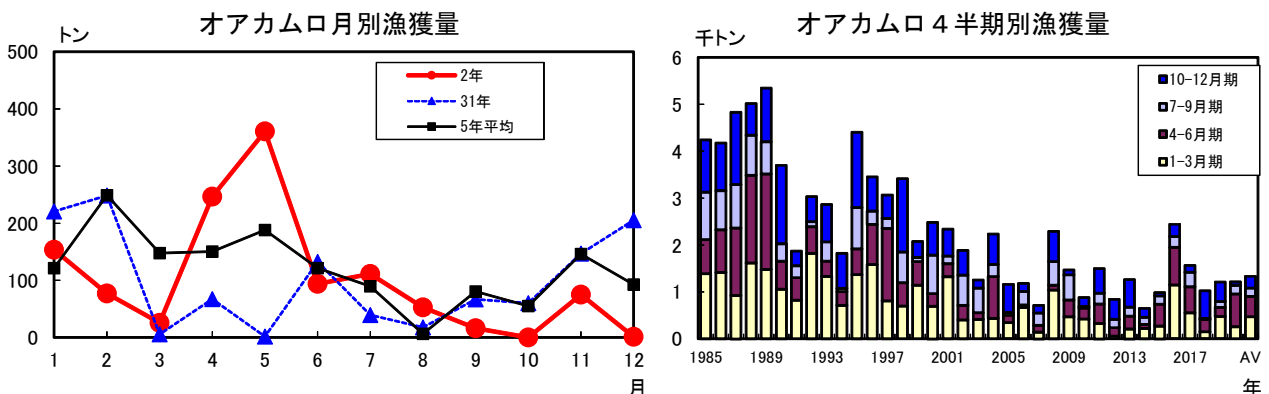


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和2（2020）年12月23日までの水揚量を使用



〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和2（2020）年10～12月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、昭和62年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成12年から15年に再度ピークを迎え15年には3,150トンと最高を記録しましたが、平成16年以降は低調に推移し、令和元年は361トンとなりました。

4港計のまき網では、野間池沖、串木野沖でマルアジ中、小主体の漁場が形成されました。期全体で30トンの水揚げで、前年の37%及び平年の47%でした。

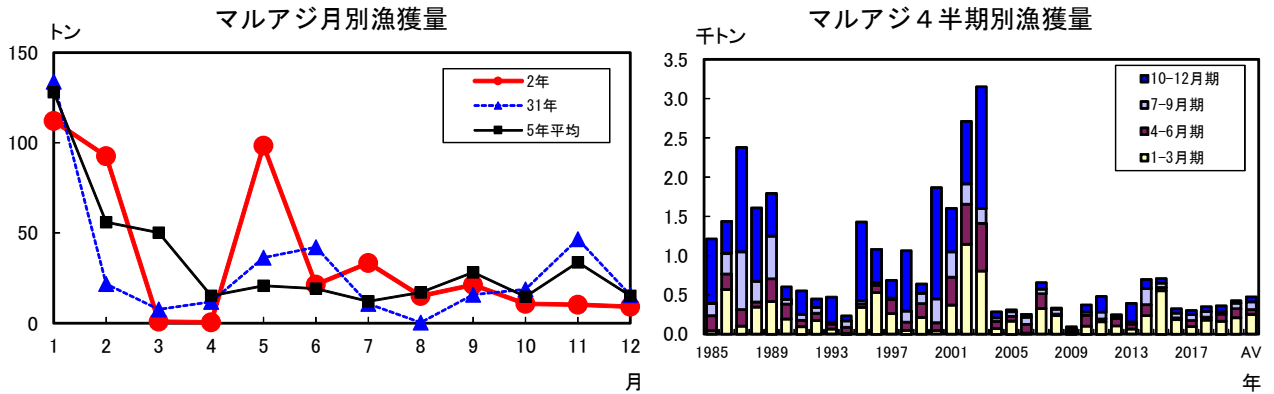


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和2（2020）年12月23日までの水揚げ量を使用